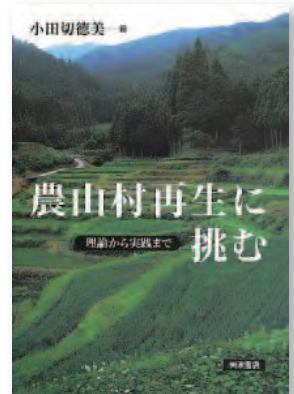


『農山村再生に挑む —理論から実践まで—』

小田切徳美編
平林 光幸

農業・農村領域 研究員



『農山村再生に挑む
—理論から実践まで—』

編 者 / 小田切徳美
出版年 / 2013年8月
発行所 / 岩波書店

「消滅」と「存続」の狭間にあるのが農山村の現状。編者の小田切氏は、「消滅」に向かう一方で、「ところがどっこい」それに抗って「存続」する力も見られる現代の農山村をこう位置づけています。

本書はわが国の農山村問題の第一人者である小田切徳美教授を中心に、現地の実態調査を重視する中堅、若手の研究者ら11人によって農山村再生の理論と実践例を取り上げたテキストです。テキストの内容は多岐にわたっており、農山村の概況・理論・政策を紹介した第Ⅰ部、農山村の経済活動に焦点をあてた第Ⅱ部、農山村の生活問題に焦点をあてた第Ⅲ部、EU農村振興政策の含意と今後の農村再生戦略を検討した第Ⅳ部で構成されています。

この本では農山村再生に向けた具体的な解決策を現地での実践例を通して提示されています。なかでも農山村の諸問題は幅広い分野（農業、林業、医療、生活、コミュニティなど）で生じていますが、こうした諸問題を個別に解決するのではなく様々な問題を組み合わせて解決していく提案やその実践事例が紹介されているところなどは注目したい点です。ここでは紙幅の関係で生活問題（7章）と地域資源管理問題（9章）について紹介します。

第1に生活問題については、地域の様々な問題を個別に解決するのではなくて、複数の問題を結びつけて解決する方法を山浦陽一氏は提案しています。過疎・高齢化に苦しむ農山村では複数の問題が同時に生じています。例えば農家の高齢化・離農によって農業生産が維持できなくなるという農業問題とともに、バス路線や食料品店等の撤退によって生活問題が生じているケースもよくあります。そこで集落営農組織を設立したり、コミュニティバスによる公共交通の確保などが必要となりますが、「複数の生活事業を組み合わせた多角的な生活支援事業」として一つの主体が複数兼営すべきだと主張します。そのメリットとして「仮に一つの分野で活動が軌道に乗ると、その組織、団体に、他分野の活動の期待も高まります。生活分野同士はもちろん、場合によっ

ては生活分野の取組が先行し、それが農作業受託や農産加工、直売所と多角化していくケース、逆に農業サイドから交通や買い物等、生活分野に活動を広げるケースもある」としています。

第2に地域資源管理問題については、それを持続的なものにするために、都市住民を含めた新たなコミュニティを形成する仕組みづくりが今後の地域資源管理にとって重要であると関司直也氏は提案しています。「地域資源を所有する主体や入会権を有する主体は、資源を利用してそこから収益を得る権利に対して管理義務を負う」からこそ、これまでは農山村地域資源の継続的な利用を可能としていました。しかし、現在の耕作放棄地の発生や牧野の荒廃など地域資源管理が困難になっているのは、そこから得られる収益が低下するとともに、また資源管理を担う農村コミュニティが過疎化や混住化、土地持ち非農家の増加等によって崩れつつあることが要因であり、そのためボランティア等の都市住民も含めた農村資源を維持管理できる新たなコミュニティづくりが求められていると述べています。都市住民の協力を継続的なものにするためにはそうした人たちの「志」に値する地域資源の「価値の再生」が不可欠で、その仕組みを具体的な実践例（島根県邑南町の「ふるさと米協定」、鳥取県智頭町の「疎開保険」の取組など）から提案しています。

そして、こうした複数の問題を捉えなおして、同時解決を試みる現地の挑戦は、多様な問題を共有する地域住民や公的機関による協働と試行錯誤の中で生まれていると評者は理解します。読者も本書で取り上げている様々な問題を組み合わせて考えてみると、新たな解決策の切り口が見つかるかもしれません。